

「推理小説」のアクチュアリティ

— 木々高太郎『熊笹にかくれて』における菊池事件の表象と探偵小説／推理小説論の展開 —

一・本稿の課題

井 川 理

木々高太郎『熊笹にかくれて』は、桃源社の「書下し推理小説全集」(一九五九・一一—一九六〇・六)の第三巻として一九六〇年五月に刊行された。同作は一九五一—五二年に熊本県下で発生したハンセン病に関わる殺人・死刑事件である菊池事件を題材に、当時広がりつつあった同事件の救援運動も背景としつつ、その独自の真相を解明しようとする趣向を持つテキストである⁽¹⁾⁽²⁾。

なお、同作が収録された全集には、木々のほか江戸川乱歩、大下宇陀児、横溝正史、角田喜久雄、城昌幸、高木彬光、島田一男、水谷準、山田風太郎、香山滋、渡辺啓助、日影丈吉、鮎川哲也、仁木悦子が名を連ね⁽³⁾、またその内容も名称の通り既発表作品の集成ではなく各作家の書下ろし長篇一作のみが収録されるというものであった。日本のミステリにはこうしたやや特殊な全集形態の前例があり、その最初のものとして戦前の「新作探偵小説全集」(新潮社、一九三三—三三)が、戦後にも「書下し長篇探偵小説全集」(講談社、一九五五—五六)とその続編といえる「書下し長篇推理小説シリーズ」(講談社、一九五九—六〇)が刊行されている。こうした全集形態には、知名度の高い既成作家により全集全体をオーソライズするとともに新進作家に長篇作品を発表する場を与え、ジャンル全体の活性化を促す企図があったと考えられるが、それは桃源社の「書下し推理小説全集」に

も踏襲されており、そこには戦前から活動する既成作家から戦後の新進作家に至るまで幅広い年代の作家がラインナップされている。そのなかでも木々は、一九三四年一月に『網膜脈視症』で『新青年』からデビューして以降は『人生の阿呆』（『新青年』一九三六・一一五）で探偵作家として初めて直木賞（第四回・一九三六年）を受賞するなどつねに第一線で活躍し続け、戦後になっても一九五四年から六〇年まで三期にわたり日本探偵作家クラブの会長を務めるなど、同全集に名を連ねた作家の中でも特に知名度が高く、ジャンルの大御所といえる存在であった⁵⁾。また、一九四九年（第二一回・戦後初）から一九六五年（第五四回）までは直木賞の選考委員も務めており、大衆文学分野の大家としての地位も確立していたといえるだろう。さらに、同時期の木々は本業である慶應義塾大学医学部教授・大脳生理学者としての地位や見識を活かし、『読売新聞』紙上で「人生案内」と題する読者相談欄の回答者として活躍するとともに、パン食の効能を説いたことでも話題となった『頭脳才能をひきだす処方箋』（光文社、一九五八・九、林麟名義）や、大脳生理学的知見の実生活への応用法を説いた『頭のよくなる本 大脳生理学的管理法』（光文社、一九六〇・一〇、林麟名義）がベストセラーになるなど、文化人としてもよく知られた存在になっていた。

しかしながら、こうしたジャンル内外での木々の立場を考え併せるとき、『熊笹にかくれて』初刊の外函裏面に記載された「作者のことば」は興味深くうつる。そこで木々は、同作の構想・執筆の経緯について以下のように述べている。

この叢書でははじめの配本に予定されていたので、一作を半ばまでかき、あとを書いていた。その時江戸川乱歩の『ぺてん師と空気男』が出た。私はこの作は乱歩のうちの一級の傑作だと思う。／それをみて私は、その時書いていた作品がいやになり、乱歩の上をゆく、私自身の作品をかこうと、新しく筆をおろし、そして出来たのがこの作である。／作者は今ただそれだけを言いたいのである。

このように、木々は本来自作のテーマや見所を記載すべき欄において、同全集の第一巻である乱歩の『ぺてん師と空気男』（一九五九・一一）を「一級の傑作」と称賛し、さらにはその「乱歩の上をゆく」意識から自作を執筆し直した経緯を述べている。ここには、自身がジャンルの大家になってもなお乱歩という偉大な先達への嫉妬心や対抗意識を燃やし、好戦的な態度を隠さない木々高太郎という作家の特徴の一端が示されてもいよう。また、ここに記されるように木々は『ぺてん師と空気男』を読んだことから、それまで執筆を進めていた原稿を反故にし、新たに『熊笹にかくれて』を構想・執筆したのだという。その作業はかなり性急に進められたようで、例えば同作の刊行直前である一九六〇年三月配本の香山滋『靈魂は訴える』巻末の広告では、木々の作品は『大心池先生最後の事件』と題されており、その内容は以下のように紹介されていた。

ひつそりと秋バラに包まれた白亜荘の一室にその秋バラに埋まつた美女の死体と一本の注射針が……更に捜査陣をあざ笑うがごとく容疑者の一女性が全裸の死体となつて……息もつかせぬ興味の中に解く連続殺人の謎!!

こうした惹句からは、当初木々が構想していた作品内容が、怪奇性やエロ・グロ的な側面を前景化する趣向を持つものであったことがうかがえるだろう。そして、実際に『大心池先生最後の事件』という題字と冒頭部分が記された木々の自筆原稿も存在することから、⁽⁶⁾「作者のことば」で述べられていた通りこの内容紹介で予告された構想に基づいてすでに執筆を開始していたことも明らかにになっている。

それにもかかわらず、木々は乱歩への対抗意識から方針転換をしたのであるが、興味深いのはそこで選択されたのが当初の構想とは対照的な現実の事件に材を得たテキストだったことである。たしかに、乱歩の『ぺてん師と空気男』は戦中・戦後の日本（東京）が舞台となる作品ではあるものの、冒頭で「このお話は時と所にたいして関係がない」と記されるように、そこで描かれるのは同時期の社会状況とは無縁な「プラクティカル・

ジョーカー」とその周囲の人々の奇妙な生きた。池田浩士が『死刑の「昭和」史』(インパクト出版会、一九九二・三)で両者の作品の対照性について「戦中から敗戦直後の日本を舞台にしながら本質的には時代や場所を超越している乱歩の作品に対して、木々高太郎が選んだ題材は、特定の日付をもつ時代と、具体的な地名をもつ場所とによって限定されていた」と指摘する通り、木々は空想的な乱歩テキストを梃子として、現実の事件をモデルとするテキストを志向していったのであり、そこで題材として選択されたのが菊池事件だったのである。周知の通り、日本では明治期の法律第一号「癲予防二関スル件」(一九〇七)以来、癲予防法(一九三一)、らい予防法(一九五三)といった一連の法律を根拠として、国家主導のもと大規模なハンセン病患者の隔離政策が推進され、差別・偏見が助長されてきた。菊池事件が発生したのはらい予防法施行直前の一九五一年であり、同事件の経過にはハンセン病に対する差別・偏見が根深く関わっていたため、死刑執行から半世紀以上過ぎた現在に至るまで再審請求が継続されてもいるのである。後述するように、『熊笹にかくれて』が発表されたのは最高裁での死刑確定直後の再審請求が行われていた時期にあたっており、こうした時代状況との関わりという点からみても、同作が乱歩テキストとは対照的な現実の事件をめぐる問題提起を企図したアクチュアルな実践であったことがわかるだろう。

なお、こうした同作の志向は発表当時から読者にも共有されており、例えば小城魚太郎(中島河太郎)は「推理の面白さより、痛ましい運命に翻弄された死刑囚の叫びが、読者の肺腑をえぐって、社会的問題を反省させる点に、本書の意義がある」(『新刊展望台』、『宝石』一九六〇・八)と述べている。また、横井司も同作について「木々が本作を発表した当時、隆盛しつゝあった社会派推理小説を意識したものであつたらうか」「あるいは再審請求運動に一石を投じるつもりであつたかもしれない」(木々高太郎作品紹介、『新青年』趣味、二〇二一・五)と、同時期に勃興しつゝあった「社会派推理小説」に連なるテキストであつたことを示唆している。こうした評言や木々自身の執筆経緯にも示唆されるように、『熊笹にかくれて』とは、木々にとって戦前期と連続する怪奇幻想やエロ・グロ的な趣向を有した探偵小説から、それとは異なる社会性・現実性を志向する推理小説へと転

回しようとする試みであつたと捉えられるのではないだろうか。そのことは、この実践がともに木々が執筆者として名を連ねた講談社の「書下し長篇探偵小説全集」ではなく、桃源社の「書下し推理小説全集」において行われたことに図らずも象徴されていたといえる。『熊笹にかくれて』は初刊以降現在に至るまで復刊されておらず、また木々の没後刊行された『木々高太郎全集』（朝日新聞社、一九七〇—七二）をはじめとする全集・選集類にも再録されていないが、これまで確認したように同時期の木々の動向とジャンルの展開を考察するうえでも検討すべきテキストであるといえるだろう。

以上のような問題意識から、本稿では『熊笹にかくれて』を考察する前提として、木々高太郎の探偵小説／推理小説論の展開を概括するとともに、木々の他のハンセン病をモチーフとしたテキストも取り上げながらその病に対する認識を検討する。さらに、題材となつた菊池事件と『熊笹にかくれて』の表象との関わりを概観したうえで、そのフィクションとしての試みの内実を考察したい。

二．木々高太郎の探偵小説／推理小説論の展開

木々は、敗戦後に推理小説というジャンル名称を提唱したことで知られている。それは同時期に「偵」の字が当用漢字から外れ、探偵小説に代わる新たな名称が必要になつたことが直接の理由であつたとされるが、こうした状況下で木々は敗戦の翌年に刊行された雄鶏社の「推理小説叢書」（一九四六—四七）の監修者として推理小説という名称を提案したのだという。その企図について、木々は初回配本となつた芥川龍之介『推理小説叢書 3 春の夜其の他』（雄鶏社、一九四六・七）の「後記」で以下のように述べている。

推理小説とは何を意味するか。それは、はじめは探偵小説をと言ふ考へであつたが、探偵小説には高級なものも低級なものもある。何を高級とし何を低級とするかと言ふ問題については、私には私の考へがあるが、

此処には論じない。とも角も、高級な探偵小説の叢書とし度いと言ふのがはじめの考へであつた。然し、やがて探偵小説だけに限るのは面白くない。推理と思索とを基調とした小説と言ふ意味で、探偵小説をもそれに含ませることにしたいと考へるやうになり、さては推理小説と言ふ新しい叢書名をつくつたわけである。

ここで述べられるように、当時木々が提唱した推理小説とは「推理と思索とを基調とした小説」という、既存の探偵小説だけでなく一般文学も含めたより包括的なものであつた。そのため、この叢書には江戸川乱歩、大下宇陀児、海野十三、小栗虫太郎といった探偵作家だけでなく、芥川龍之介、森鷗外、小島政二郎といった純文学・通俗文学の作家、さらには未刊だったものの文学者ですらないジグムント・フロイトなども含まれていたのである¹⁰⁾。しかし、木々が提唱した推理小説はその対象の広範さゆえに、例えば中島河太郎が「極めて語義の捕捉しがたいものとなり、却つてさまざまな混乱をまき起すに至つた」(「木々高太郎論」、『別冊宝石』、一九五七・一二)と述べるように、ジャンル名称としてすぐに定着することはなく、同時期の文壇内では未だ探偵小説の方が優勢のままであつた。そのことは、例えば敗戦後に『新青年』に代わつてジャンルを牽引する雑誌となつた『宝石』(一九四六―六四)の角書きが「探偵小説専門誌」とされていたことや、先述した作家の組織体の名称が日本探偵作家クラブ(一九四七年発足)であつたことにもうかがえよう。

こうしたジャンル名称としての推理小説が探偵小説に取つて代わるのは、ちょうど『熊笹にかくれて』が発表された一九六〇年前後の時期であつたと考えられる。その契機となつたのは仁木悦子『猫は知っていた』(一九五七)の映画化作品も含めたメディアミックス的なベストセラー化と、¹¹⁾松本清張を中心とする社会派の台頭であつたとされるが、そこでの推理小説は当初の木々の企図とは異なり、戦前の探偵小説から区別される健全なものとしてのミステリを指す語として定着していくことになる。また、この呼称の推移は同時期の推理小説と冠した全集・アンソロジーの増加にも示されている。例えば、日本のものでは先に挙げた「書下し長篇推理小説シリーズ」や「書下し推理小説全集」のほか、「日本推理小説大系」(東都書房、一九六〇―六二)や「現代長篇

推理小説全集」(東都書房、一九六一)などがあり、海外作品の集成としては「世界推理小説全集」(東京創元社、一九五六—六〇)、「世界推理小説大系」(東都書房、一九六二—六五)などが挙げられる。さらに、こうしたジャンル名称としての推理小説の一般化は、一九六三年に日本探偵作家クラブが社団法人化を契機として日本推理作家協会へと改称されたことで完結したとみてよいだろう。

なお、こうした推移があった一九五〇年代後半の木々は、作品発表数は減少していたものの先述のように日本探偵作家クラブ会長を務めるなどジャンル内では依然として存在感を放っていたが、ここで注目したいのは同時期に木々が自身の探偵小説論を更新していたことである。まず、木々が作家デビュー直後の一九三〇年代後半に甲賀三郎を相手としたいわゆる「探偵小説芸術論争」を行っていた当時の言説を確認しておく、そこでの探偵小説の定義は「謎があり、論理的思索があり、そして解決がある、と言う三つの重要な条件」があり、「その条件が充たされれば充さるる程、すぐれた文学となるのであつて、斯くして益々芸術となるのである」(『自序』、『人生の阿呆』、版画荘、一九三六・七)というものであった。⁽¹³⁾このように、木々は探偵小説の条件として「謎」「論理的思索」「解決」の三つを挙げ、詩歌や戯曲等と同様にその条件・形式の徹底を通して探偵小説も「文学」「芸術」になりうると論じている。しかし、そこで述べられる「文学」「芸術」の内実が不明であり、またその具体例となる実作が提示されることがなかった点に当時の木々の探偵小説論の大きな欠陥があった。⁽¹⁴⁾

この木々の「探偵小説芸術論」は戦後に相手を甲賀から乱歩へと移した論争へと変奏されるが、その時点でもあまり論旨に変化はみられない。しかし、木々の探偵小説論は「探偵小説入門」(『別冊宝石』、一九五三・五)における人間の行動(生活・性格)を規定する「動機」の重視というのちの松本清張とも連なるような観点を経て、一九五〇年代半ばに転換を遂げていくことになるのである。その木々の新たな探偵小説論は、一九五六年三月一二日に行われた東京作家クラブ主催の文芸講演会(於・新宿紀伊國屋喫茶室)での講演「最近の探偵小説」で初めて示され、その後「探偵小説の本質」(『探偵倶楽部』一九五六・六)にまとめられる。その要点は以下のよう

私の現在考えている探偵小説本質論は、それは人間がいままで持つてなかつたこのような文学であります。人間の知恵の勝利を謳う文学であります。「……」人間がかつて持つたことのないところの知恵の勝利を高らかに謳う文学、人間の暴力に対して、金力に対して、我らは権力に対してたゞ一つ知恵だけで勝つことができるということを高らかに謳おうとする文学であると考えてるに至りました。

このように木々は探偵小説の本質を「人間の知恵の勝利」に見出しており、ここでは「この本質さえ失われなければ必ずしも三つの条件を守らないでも探偵小説」たりうると、従来堅持してきた「謎」「論理的思索」「解決」の三条件すら放棄している。これらの形式的条件を除外して探偵小説と呼べるものになるのかは疑問だが、興味深いのは木々がここで述べる「知恵」を、一般的な探偵小説論の中でしばしば言及される「理智」とは区別していることである。木々によれば、「理智」が自然科学的知見や物的証拠などを用いた推理にみられるような科学性・論理性を指すのに対して、「知恵」は人間社会に不可避の暴力や悲惨な運命に抗う力の源泉になるものであるという。木々は、こうした「暴力」「金力」「権力」の不当な行使に対する「人間の知恵の勝利」を描くことを探偵小説の本質として捉え直していくのである。また、木々は同趣旨を述べた評論「探偵小説についての新論」(『探偵実話』、一九五六・五)において、この「知恵の文学」を「探偵小説と言って悪ければ、推理小説と名づけてもよい」と述べ、この「人間の自然の欲求としての知恵を主題とした推理小説」にジャンルの「今後の新しい方法」を見出している。このような言説をふまえるならば、木々はここで敗戦直後に自ら提起した「推理小説」を、「人間の知恵の勝利を謳う」という内容的な限定を加え、定義し直したと理解できるだろう。

この木々の新たな探偵小説論は文壇内で少なからず議論を呼んだが、木々自身も言及しているように、その内容は直接的には中島河太郎の評論「探偵小説変貌論のその後」(『探偵倶楽部』一九五六・二)に触発され構想されたものであった。この中島の評論は、敗戦後の「本格推理の傾向は衰微に向い、社会性、人間性の追求、もしくは犯罪心理の解剖へ関心が寄せられつつある」という同時期のジャンル状況の変化を論評したものであった

が、木々はこうした中島の整理をふまえて自らの探偵小説観を再考していったのだという。なお、その後に中島の方も「木々氏の探偵小説新論」（『探偵倶楽部』、一九五六・六）で木々の探偵小説論に言及し、「謎・推理・解決の三条件」が満たされなくとも探偵小説たりうるとしている点には疑問を呈しているものの、その「知恵の勝利を描く」ことが探偵小説の本質的要素であるという中心的な見解には共鳴している。

それでは、この木々の述べる「人間の知恵の勝利」とは具体的にどのような内容を指すものであろうか。

この木々の新説をテーマとした探偵作家クラブの例会（土曜会）での討論（木々高太郎・江戸川乱歩・大下宇陀児・角田喜久雄・中島河太郎・大坪砂男・春田俊郎「探偵新論争」、『宝石』、一九五六・六）において、木々は「知恵の勝利」が描かれた作品例として大下宇陀児の『石の下に記録』（二九四八—五〇）や『虚像』（一九五五）を挙げ、それらの「社会的の必然性がその犯罪にあり、そしてその必然性のかくれた面を明らかにすることによって、その犯罪を解決する」趣向にその特徴を見出している。また、木々は荒正人・中島河太郎・田中潤司が列席した座談会「松本清張を語る」（『宝石』、一九六三・六）では、「社会派」の潮流について「歴史的には大下宇陀児が、非常に苦しんで書いたものが、松本清張に至って、花のように咲いてきたという見方」を示している。こうした言説をふまえるならば、木々が述べる「人間の知恵の勝利を謳う文学」としての探偵小説・推理小説とは、一九五〇年代後半に台頭する社会派的なりアリズムに連なるような、犯罪事件をめぐる人間の在り様とその裏面にある不条理な社会や権力の構造を抉り出すものであったと捉えられるだろう。

なお、権田萬治も『日本探偵作家論』（双葉社、一九九六・五）において同時期の木々の探偵小説論を「社会派の道を切り開く理論」であったと述べ、さらにはそれに続けて『熊笹にかくれて』を「どうも戦前の氏の迫力が多少欠けているような気がしないでもない」としながらも、「このような立場に立つ氏が、実際にあった事件をモデルに社会的関心を再燃させた力作である」と評している。この権田の評言にあるように、これまで述べてきた木々の「人間の知恵の勝利を謳う」ことを本質とする探偵小説の実作の試みとして『熊笹にかくれて』を捉えることができるのではないだろうか。先述したように、同作は十分な準備期間をとって構想・執筆されたもので

はなかったものの、そこに同時期の木々の探偵小説論の内容と重なる企図が少なからず伏在していたことは、作品の冒頭に付された「箴言」にもうかがうことができる。

この物語は、悉く作為にして、人物、地名、すべて現実にあらざるが故に、作者はその責任をあげて拒否す。／若し現実と相似たる物語あり、その前半は描かれたるも、尚後続の見出さることなくして停頓し居るものあらば、試みにこの物語の構想を参照せば、更に進むを得るものあらむか。作者これを知らず。

ここで木々は最初に自作が「悉く作為」であることを強調しながらも、後半ではそれゆえに「相似たる物語」である「現実」の「停頓し居る」事件の解決に寄与する一つの視点を提供しうる可能性を示唆している。片岡清子はこの「箴言」に「捜査関係者を挑発し視点の転換を促し真実を探らんとする熱意と、大脳生理学を専門とした医学博士・木々の精神分析からの挑戦が窺える」（『文芸の散歩道 ハンセン病患者差別を告白 木々高太郎『熊笹にかくれて』、『人権と部落問題』、二〇〇三・七）ことを指摘しているが、ここにはまた、現実には立証が困難な事件のあり得べき真実をフィクションの形で示してみせたことへの木々の自負が看取されるだろう。しかも、そこで再考されるべき対象として選択されたのが菊池事件であったことも重要である。なぜなら、菊池事件のあり得べき真実を示すことは、そこに関わる警察・司法という「権力」の不当性を暴くだけでなく、同時期の日本社会におけるハンセン病への差別・偏見という「暴力」の在り様を剔抉することに他ならなかったからである。なお、この『熊笹にかくれて』とほぼ同時期には、木々がその才能を見出し文壇進出の契機を作った松本清張の『砂の器』（『読売新聞』夕刊、一九六〇・五・一七―六一・四・二〇）が連載開始されてもいた。『砂の器』は、事件の犯人である新進気鋭の音楽家・和賀英良（本浦秀夫）の父がハンセン病患者であり、その家系を隠蔽するために殺人を犯すという構成になっていた。すなわち、ここでは犯罪の動機を構成する主要因としてハンセン病が位置付けられ、日本社会にはびこる病に対する差別意識が最悪の形で表出してしまいう在り様が描き出されてい

たといえる。

それでは、こうした同時期のテキストに対して、『熊笹にかくれて』におけるハンセン病の表象はどのように評価できるもののだろうか。次節では、木々のハンセン病をモチーフとする他のテキストや、木々自身のハンセン病に対する認識を確認したうえで、その点を検討したい。

三、木々高太郎とハンセン病

木々高太郎は『熊笹にかくれて』以前にもハンセン病をモチーフとした作品を発表していた。その代表的なものとして、『青色鞆膜』（『新青年』、一九三五・四）、『葦草』（『モダン日本』、一九四六・六）、『産院』（『週刊朝日』、一九四九・一・九一五・八）などが挙げられるだろう。

『青色鞆膜』はデビュー直後の短篇連作の一つで、分家の嫡木千沙子をめぐり、本家の嫡子で医学生の佐多夫とその家の下男の子・喜久雄との間で繰り広げられる恋の闘争劇を中核とした、一種の貴種流離譚である。作中では、最終的に「青色鞆膜」により喜久雄が本家の正統な跡取りであることがわかる一方で、佐多夫は「巡礼に來た当時の祖母」との少ない接触からハンセン病に感染していたことが判明し、それが最後の佐多夫の「自殺」の要因であったとされている。大西巨人は「ハンセン氏病問題その歴史と現実、その文学との関係」（『新日本文学』、一九五七・七八）の中で、こうした『青色鞆膜』のハンセン病表象が国家規模で行われた強制隔離政策を推進する「伝染性の不当な強調と過大な宣伝」に寄与する「甚だしく有害にして反動的な作用」をもたらしたと手厳しく批判をしているが、たしかにこのテキストにはいまだハンセン病の原因究明や治療法が確立していなかった戦前期における認識の限界が示されていたといえるかもしれない。

その後日本では戦後に至って治療に効果的なプロミンが輸入・開発されるようになり、ハンセン病は「不治の病」ではなくなったものの、周知の通り国家の隔離政策は存続し、戦前から行われていた地域的な患者の排除運

動である無らい県運動もより苛烈に展開されていく。⁽¹⁶⁾そして、戦後の木々の創作にみられるハンセン病認識も、戦前からほぼ変化がなかったと考えられる。『葦草』は、のちに『詩と暗号』（新太陽社、一九四七・六）にまとめられる連作短篇の最初の作品であり、ある富豪の妻が転地療養先へと向かう夫を列車から突き落とした殺人事件をめぐる物語となっている。作中では、夫が転地療養する理由となった「神経衰弱」の原因はハンセン病を発症したからであり、事件はそのことに悩んだ夫が妻を追連れに心中しようと揉み合いになった末の事故であったことが明らかになる。このテキストについては、ハンセン病当事者の永田政雄が「心理に仲々追いつめた面白いものがあるが、ただ文中に自殺する気でいた等の文があるのは、医師としての作者の潜在意識に、私は或る疑問を感じられずには居られない」（『続・癩と探偵小説』、『愛生』、一九五四・三）と、ハンセン病を当然のように自殺を引き起こす原因と位置付ける「医師としての作者」である木々の認識を疑問視している。

また、『産院』では、孤児院を経営しながら堕胎法撤廃の活動に従事していく主人公・岸尾讓吉の学生時代の恋人で一時期配偶者ともなった泉和子がハンセン病研究と臨床に従事する設定となっている。作中では、冒頭で「レプラ」の研究者に女性が多いことについて、その低い社会的地位の反作用からくる功名心が理由であったという侮蔑的な憶測が示されるとともに、和子が勤める聖ラザロ病院の院長が患者治療によりハンセン病に罹患してしまう逸話なども記される。こうした点からすれば、木々は戦後に発表した創作においても、『青色鞆膜』と同様に本来は微弱ならぬ菌の「伝染性の不当な強調と過大な宣伝」を繰り返していたといえるだろう。

なお、同時期のハンセン病に関する木々の言説として、先に言及した『読売新聞』の「人生案内」も確認しておきたい。同記事の回答をまとめた木々の『事実は小説より困る 推理的人生案内』（大樹書房、一九六一・八）によれば、この読者相談欄の回答者を担当するようになったのは当時『読売新聞』婦人部の部長であった白石潔の依頼によるものであったようだが、⁽¹⁷⁾そこでの相談内容にはハンセン病に関するものも散見する。その見出しをいくつか例示してみれば、「親類にライ病患者／彼女との婚約解消が心配」（朝刊、一九五七・一二・二三）、「結婚はできないか／彼女の父がハ

ンセン氏病の風聞」（朝刊、一九五九・一〇・三）などが挙げられる。⁽¹⁸⁾こうした見出しからも明らかのように、相談内容は概ね相談者の恋人や婚約者の家族・親族などにハンセン病患者がいることがわかり、周囲から交際を反対されているがどうすればよいのかといったものが多かった。また、このうち最初に挙げた見出しの記事本文に「ハンセン氏病は遺伝性の病気でしようか」という質問がみられるように、これらの悩みはそもそも相談者自身や周囲の人々に病の正しい知識が周知されていなかった状況に由来していたともいえる。そのため、これらの相談に対する木々の回答もハンセン病が伝染性であるという正確な科学的知識を教示するとともに、それを相談者の周囲の人々に説明する際のポイントを整理して示すなどしている。このように、木々は当時の日本社会において未だに根強かったハンセン病を遺伝性とする考え方を科学的に否定し、正しい知識を広めることに寄与した側面もあつたといえる。

しかしながら、他方で創作にも表れていたように、木々はハンセン病の感染力を非常に高いものと認識しており、またそれをメディア上でも繰り返し強調していた。このことは、例えば木々が古畑種基・南博・城昌幸とともに列席した座談会「戦後異常犯罪の解剖」^{アフレール}（『宝石』、一九五一・八）の中で「癩病は医者が届出の義務をもっているんだけど、強制収容してくれない」と隔離が不徹底である現状に疑義を呈し、それゆえ「癩病患者が逃げて、乞食をして、映画をみたければ映画をみる、そして病菌をふりまくわけです」と述べていることなどにも示されている。このように、当時の木々のハンセン病に対する認識は、科学的な知見に基づく側面を有していた一方で、当時の隔離政策や無らい県運動を推進する論理と重なり合うような病を過度に危険視する側面を有してもいたといえるだろう。

また、同時期の木々のハンセン病に関わる重要な出来事として、岡山県のハンセン病療養所である邑久光明園及び長島愛生園への訪問についても確認しておきたい。この訪問は、木々によれば「藤楓会^マの理事をしている同級のH君からすすめられたり、たのまれたりして」（『光明園にゆく』、『山陽新聞』朝刊、一九五四・七・二四）行われたものだったという。このHとは木々と慶大医学部の同級生で、ちに藤楓協会の第二代理事長となる濱野規

矩雄のことであると思われるが、木々はこうしたつながりから一九五四年の六月一〇日に邑久光明園の設立四五周年記念式典に参加し、翌日には長島愛生園で講演を行うとともに、患者達や園長の光田健輔ら療養所関係者らとの座談会に列席している。¹⁹⁾ この座談会では主にハンセン病研究や療養所の現状などが話題となっているが、木々はそのなかで療養所内に一般社会と同等の「一種の満足の出来る社会を造り上げてやる事」が患者の幸福にとつて重要であると説いている。これは一見そこに同席し直接交流もした患者達に対する善意からの発言のようにも聞こえるが、その裏面には療養所の生活に様々な制約があることを知りながらも、患者を終生隔離すること自体には何の疑問も持っていない木々の認識が見て取れるだろう。²⁰⁾

なお、木々はこの両療養所への訪問後、同年七月二四日の探偵作家クラブの例会(土曜会)にて「癩と探偵小説」という講演も行っている。その摘要が「第九十三回土曜会記録」(『探偵作家クラブ会報』八七号、一九五四・八、渡辺剣次執筆)に記録されているので、以下に全文を引用したい。

氏は最近、瀬戸内邑久の光明園創立四十五周年記念行事に招聘され、光明園と附近の長島愛生園を悉に見学されたが、講演は、その見聞報告談とも言ふべきもの――。まず、癩研究の世界的權威光田健輔医博者の英文写真附図入りの資料が回覧され、癩のすざまじい症状が観る者の胸を打つ。／木々氏は、風光明媚の瀬戸内海の島のたたずまいから説き始め、医師看護婦の異常な献身ぶり、島と外部との交渉、病院の施設、国庫補助の療養費、島内の患者の日常生活の実態等に触れる。／次に、癩の特効薬と喧伝されたものはことごとくインチキで、特効薬は未発見であること。そのため島では昔ながらにプロミン(スルフオンアミド剤)の注射と大風子油によつて僅かに病勢を喰止めている現状。欧米文明国には患者は僅少で、そのため日本が癩研究の第一人者であること。朝鮮の患者が、日本の国立療養を募つて続々と密入国していること。患者の社会組織と性生活。癩は結核とよく似た伝染病であること等――話題は迫力があり、興味深い講演であった。／最後に、特効薬の発見も空想ではないと結論され、又文学に描写される癩は、半数以上が迷信的な遺伝病と誤記されている事実

を指摘された。／終つて癩の伝染と特效薬の問題を中心に熱心な質疑応答があり、午後四時散会。

ここにみられるように、従来の文学作品においてハンセン病が「遺伝病」とされる誤りに注意を促しながらも、プロミンの効果を軽視しハンセン病を感染力の強い「結核とよく似た伝染病」と強調している点など、現在からみれば問題の多い内容を述べていたことがわかる。そのなかでも看過しえないのは「朝鮮の患者」の「密入国」への言及であろう。藤野豊が『ハンセン病と戦後民主主義なぜ隔離は強化されたのか』（岩波書店、二〇〇六・一〇）で指摘するように、このような同時期の朝鮮人患者の「密航」はあくまでも「風評」「うわさ」の域を出ないものであったが、木々は後年にも「困ったことには朝鮮のらい病が日々何人と密航してきておるそうです」「やがてらい病で日本が減ぼされるのじゃないかとも考えられます」（林麟『頭の良い子に育てる本』金剛出版、一九六七・九）などと、朝鮮人患者の「密航」を事実と誤認し、過度に危険視する差別的発言を繰り返していた。なお、このような木々の認識は、日本のハンセン病患者の強制隔離政策を推進してきた医学者で木々とは療養所訪問の折に直接の交流もあつた光田健輔の考えに基づいたものであつたと考えられる。例えば、光田は一九五〇年二月一日に林芳信（多磨全生園）、矢島良一（栗生楽泉園）とともに出席した第七回衆議院厚生委員会の上で、朝鮮から日本に密航してくるハンセン病患者が多いことを強調し、「近來療養所の八千三百人の日本人は、おかげさまでおちついてはおりますが、人を殺すことを何とも考えないような朝鮮の癩患者を引受けなければならぬという危険千万な状態にありまして、患者の安寧秩序が乱され、また職員も毎日戦々兢兢としてこれらの対策に悩んでおるような状態でございます²²⁾と露骨に朝鮮人患者への差別的態度を表しつつ、療養所の治安維持強化の必要性を訴えている。こうした共通点をふまえるならば、木々のハンセン病認識は光田健輔ら日本のハンセン病政策を牽引した医学者たちの影響を受けたものであつたと考えられる。

それでは、『熊笹にかくれて』におけるハンセン病の表象はいかなるものであつたといえるだろうか。まず、作中で日本のハンセン病の歴史的な経緯と現状について述べている箇所を引用したい。

日本のハンセン病患者の推定数は、約一万五千と言われる。実に不思議な熱心さで、日本では昭憲皇太后が、明治天皇の若い皇后時代から、救癩事業について世論を喚起し、大事業をおこす起縁をつけられた。それは癩医の養成と全患者隔離の施設である。／第二に、その声に応じて立つたのが、日本の女医であつた。だから救癩事業のために最も力をつくしているのが、日本では女性であるといつてよい。欧米では宗教の立場から進められたが、宗教のない日本では、専らヒューマニズムの運動として推進されたのである。／第二の隔離施設というのは、病院の建設と拡張である。これを隔離というからいやに聞えるのであつて、入院と称すれば一つもいやなことではない。ライ病に比すれば数等嫌悪すべき精神病院については、世人は単に入院と称しているのに、ライ病については、何か強制的な、嫌忌的な感じを与えたのは、日本でも古い思想、ハンセン以前の思想にもとづくものと言わなければならぬ。(一四一—一四二頁)

ここでは、明治期に昭憲皇太后の尽力により創始された「救癩事業」の要点を「癩医の養成と全患者隔離の施設」の設置の二点にまとめている。なお、この引用部分は地の文であるため、特定の作中人物の志向を表しているわけではなく、あくまでも一般的な日本のハンセン病の歴史を説明した記述であつたと考えられるが、ここで最も問題だと思われるのは引用部分後半の「隔離」という言葉に疑義を呈している点であろう。周知の通り、一九三一年の癩予防法施行以後のハンセン病患者への処遇は、発症が確認されれば強制的に療養所に入れられ、有効な治療も施されず終生そこから出ることを許されない「隔離」そのものであつた。それをここで提案されるような病の回復を目的とした一時的な「入院」と呼び変えることは、隔離の強制性と療養所の実態を隠蔽する詐術にほかならないだろう。さらに、引用部ではハンセン病の比較項として「精神病」に言及し、精神病院を「数等嫌悪すべき」施設と劣等に位置付けてさえいる。こうした特定の病気及びその療養施設に対する偏見を助長するステイグマの付与は、「医師としての作者」が記したとは到底考えがたい問題含みのものといわざるを得ない。『熊笹にかくれて』におけるこうした特定の病気とその患者へのイメージの固定化は、探偵役となる大心池先

生の推理方法である「心理法則」にも看取することができる。以下に引用するのは、作中で大心池が事件に関心を持ったきっかけを述べた箇所、および、無実を訴えている辰治が一度だけ行った自白に注目した理由を述べた箇所である。

「つまりライ病と結核とはよく似ている菌ですが、その発現の仕方は全く対蹠的なのです。『……』／『……』／『……』結核療養所にはストライキもありますし、殺人もありますし、その他尖鋭化したあらゆるものが、あります。ところが、ライ院はその反対で患者はおとなしく、ゆるい感謝の気持ちです。生命も短くはない——それで、凶悪犯が極めて少ない。そのことから考えると、この事件が最初は不思議でした」（六三—六四頁）

「賀毛辰治は一度だけ自白しています。そのあと頑強に否認し続けているに係らず、一度だけ自白しています。『……』何故自白したのでしょうか。誰でも拷問があつたと言いますが、私は信じません。『……』／『……』／『……』辰治のはあまり進んでいませんから、そんな極端な例とは較べものになりませんが、少なくとも心理的には鈍になつてゆくというのが、この病気の特徴です、ですから拷問は役立ちません。『……』それがまた、何となく辰治の無罪を思わせる一つの理由でもあります。』／『……』／『……』鈍になるということは、すぐケンカ腰になる、予告なしに殴るというような性格と全く異なるのです。つまり殺人などを犯すのとは遠いと感じるのですよ。これが今までハンセン氏病患者に死刑を宣告せられるのに該当した例はない。誰ひとりとして死刑の如き刑に問われるような罪をおかしていないので、この例がさがれるのです」（二八四—二八六頁）

このように、大心池が事件に関心を持ったきっかけは、ハンセン病患者が「おとなしく」「凶悪犯が極めて少

ない」という「心理法則」に矛盾しているという点にあったという。また、辰治が行った唯一の自白が拷問によるものではないとみなす理由も、ハンセン病の症状が感覚を「鈍」にしていくため、その患者に対する身体的・精神的な拷問の効果は稀薄であるという推察によるものであった。そして、このハンセン病とは対照的な「心理法則」が見出されるのが結核患者であるという。そこで述べられる患者の正当な権利を主張する「ストライキ」と明確な暴力・犯罪行為である「殺人」をともに「尖鋭化した」人格・性質の発現と捉える認識も疑問だが、ここには結核患者を「尖鋭化した」存在とみなす一方でハンセン病患者を「おとなし」い存在とみなすという、特定の病気と人格・性質とを結び付け、個別性を顧慮せずにカテゴリ化して把えようとする大心池の人物把握の特徴が見て取れるだろう。

また、こうした人物把握の方法は、「全国ハンセン病患者協議会の人々」が事件の救援に立ち上がった要因について、「ハンセン氏病の患者から凶悪犯の出ることは、統計上甚だ少ないという考えが、心の底の方に一種の自信となつて横たわつていたのではないかと考えられる」と記した地の文にも確認できる。これらを考え併せるならば、地の文の語り手と大心池のハンセン病に対する認識はほぼ一致していたといえる。こうした記述は、「尖鋭」的ではないにもかかわらずハンセン病患者達が結束せざるを得なかった事件の悲壮性を演出する効果を企図したものであったとも考えられるが、当然ながら実在の「全国ハンセン病患者協議会の人々」が被告の救援を行った理由は「ハンセン氏病の患者から凶悪犯の出ることは、統計上甚だ少ない」からではなく、「ハンセン氏病の患者」であることを理由に不当な扱いを受け死刑にまで至ってしまったという、差別・偏見による人権侵害への批判と是正を目的としたものであった。その点をふまえるならば、テキストにおけるハンセン病及び菊池事件の認識には、そうした病に対する差別・偏見に根差した被告への理不尽な扱いや不当な権力行使それ自体に対する批判的な視座が欠落しているといわざるを得ない。

ただし、こうしたテキストにみられるハンセン病患者の人格・性質を「おとなしい」存在とみなす認識は、同時期のハンセン病政策に関わった医学者の認識とは異なるものであったともいえる。例えば、一九五一年一一月

八日に光田健輔（長島愛生園）、林芳信（多磨全生園）、宮崎松記（菊池恵楓園）らが列席した参議院厚生委員会のいわゆる「三園長証言」のなかで、宮崎松記は「収容の通知を受けました患者が」「逆恨みをいたしましたして、一家謀殺を企てて、ダイナマイトをその衛生主任の家にぶち込んだのであります」と菊池事件をハンセン病患者の粗暴性を示す一事例として言及し、患者の隔離と拘束強化の必要性を訴えている。⁽²³⁾ このような宮崎のハンセン病患者を「尖鋭化した」存在とみなす認識は、『熊笹にかくれて』とは対照的なものであったといえる。もちろん、『三園長証言』が行われた時期とテキスト発表時の事件をめぐる状況は少なからず異なっているものの、両者にはこうした認識の差異も存していた点には留意すべきであろう。

それでは、こうした木々及び『熊笹にかくれて』におけるハンセン病への認識をふまえたうえで、次節ではあらためてテキストの菊池事件の表象について検討していきたい。

四. 『熊笹にかくれて』の菊池事件の表象

まず、『熊笹にかくれて』における賀毛事件のモデルとなった菊池事件の内容を概観しておきたい。⁽²⁴⁾ 同事件は、一九五一年から五二年にかけて熊本県菊池郡水源村日生野部落（現菊池市）で発生した同一被害者の二つの事件から構成される。

第一の事件は、一九五一年八月一日に男性H（当時四九歳）宅にダイナマイトが投げ込まれ、日本人とその次男が負傷した事件である。その後、同月三日に殺人未遂と火薬類取締法違反で同じ村に住む農家の青年男性F（当時二九歳）が逮捕されている。なお、このF逮捕の背景には、当時全国的に展開していた無らい県運動があった。同時期の熊本県は菊池恵楓園の一千床増床を計画していたため、県主導のもと特に苛烈な患者狩りが行われた地域であり、⁽²⁵⁾ Fもその摘発の対象とされたのである。Fは生来頑健で全く自覚症状はなかったものの、事件前年の一九五〇年一二月に収容要請の通知を受け、菊池恵楓園での受診の結果陽性と診断される。しかし、その結

果に承服できなかったFは翌年初めに県内外の病院で再検査を行い複数の陰性の診断書を得て提出したものの、県は執拗に収容要請を続けてきていたのである。第一の事件はこうした最中に起きたが、その捜査線上にFが浮上したのは彼をハンセン病患者であると県に報告したのが当時村役場の衛生係をしていた被害者のHだったからであり、警察はそのHの供述のみを根拠に、Fの逆恨みによる犯行と断定し逮捕に至ったのである。なお、凶器に使われたダイナマイトは古い軍用のものであったが、Fはそれを扱った経験も知識も持ち合わせておらず、逮捕後に行われた二回の自宅搜索時にも何も発見されなかった。しかし、その後Fの母親が警察署に呼ばれ行ってみると、そこで凶器と同型のダイナマイトの導火線や布切れなどがF宅から「発見」されたものとして示されたのだという。逮捕後にFの身柄は菊池恵楓園内に設置された熊本刑務所菊池拘置所に拘束されたが、これらの被害者証言や凶器を証拠としてFは同年八月二〇日に起訴され、翌一九五二年六月九日に熊本地裁で懲役一〇年の判決が下されている。

Fはただちに無罪を主張して福岡高裁に控訴したものの、同年六月一六日に菊池拘置所から脱走する。F自身の手記によれば、脱走の理由は有罪・無罪にかかわらず終生刑務所及び療養所から出ることができないという「二重の壁」に悲観したからであり、その前に「母と娘に会いたい、会って話したい」という思いからであったという（「手記 獄窓に仰ぐ十年目の星わびしくライゆえのぬれぎぬに泣く死刑囚の告白」、『マドモアゼル』、一九六一・七）。そしてこのFの逃走から三週間後の七月七日、水源村の山道でHが上半身を二六箇所も刺され殺されたのが、第二の事件である。当然のように容疑は逃走中のFに向けられ、警察はその行方を追うとともにFの家族・親族らに取り調べを行っていたが、そこで叔父・叔母から事件当夜に家を訪れたFがHを殺害した旨の発言をしたという証言を得ている。また、殺害に使用された凶器について、最初に検死を行った信岡徳医師は鎌であると推定したものの、のちに死体解剖を担当した熊本大学法医学教室教授の世良完介は鎌ではなく刺身包丁もしくは短刀と推定し、その後すぐにFの叔父が所有する肥料小屋からその特徴に合致した包丁が発見されている。鑑定の結果、その包丁からFの指紋や血痕等は全く検出されなかったにもかかわらず、世良は包丁を「水

に浸し水で洗い落とした場合等には血痕は水に溶解し去る」という荒唐無稽な理由から、それが事件の凶器であると「断乎として推定し得る」と結論付けたのである。²⁶その後、同月一二日に同村内の農事小屋に潜伏していたFが発見・逮捕されるが、その際に警官が発砲したため、Fは右腕に複雑骨折と大量出血を伴う重傷を負った。しかし、Fは応急措置を受けたのみで十分な休養も与えられないままその日のうちに取り調べが行われ、そこで唯一の自白調書を取られている。その後のFは一貫して両事件について無実を主張していたが起訴され、翌一九五三年八月二九日に熊本地裁で死刑判決が下されている。

なお、これら二つの事件の公判は全て菊池恵楓園内に設置された特別法廷での出張裁判で行われた。当然療養所内であつたためば非公開に近く、また関係者は全て防護服・マスク・ゴム手袋を付けた状態で、証拠調べなども「感染対策」として長火箸を用いて行われたという。さらに、先述の通り証拠は自白調書や親族証言、捏造が疑われる凶器等の不十分なものしかなく、またF自身も無罪を主張していたにもかかわらず検察側の起訴状や証拠に全て同意するような非協力的な弁護人しかいないような状況で、死刑判決にまで至っているのである。そもそも最初の逮捕自体も、犯人をハンセン病患者とみなす予断から行われていたことも考え併せれば、Fは事件に関わる警察・司法プロセスのあらゆる局面においてハンセン病に対する差別に根差した不当な扱いを受けていたといえるだろう。

その後Fは同年九月二日福岡高裁に控訴するが、そこでも地裁と同様に菊池恵楓園の隣接地に開設された熊本刑務所菊池医療刑務支所内の特別法廷で実質的に非公開のまま行われ、一月一三日に控訴棄却、原審通りの死刑判決が下っている。さらに、翌一九五五年一月二七日には最高裁に上告するも、一九五七年八月二三日に上告棄却、死刑判決が確定している。その後もFは外部の支援を受けながら三度にわたり再審請求を行ったが、全て棄却されている。特に三度目の請求時には、親族証言を含めた日生野部落の人々の証言がハンセン病患者を排除しようとする意識から行われた虚偽のものであったことや事件当日のFのアリバイ証明など、様々な有力な証拠が提示されていた²⁷。それにもかかわらず、一九六二年九月一三日に第三次再審請求は棄却、翌一四日にはFの身

柄は福岡拘置所へと移送され、そのまま死刑が執行されてしまうのである。⁽²⁸⁾

死刑執行後に大きな動きはなかったものの、らい予防法の違憲性が熊本地裁に認定された二〇〇一年五月以降に設置された検証会議で菊池事件は再び注目されるようになり、二〇一二年に菊池事件再審弁護団が結成されると、同年に最高検察庁に再審請求を要請、翌二〇一三年には最高裁判所へ特別法廷の検証を要請している。その結果、検察への再審請求要請は通らなかったものの、最高裁判所は特別法廷で不当な取り扱いがあったことを認める談話を公表した。その後も検察が再審請求を行わないのは不当であるとして二〇一七年八月に菊池事件国賠訴訟が提起され、二〇二〇年二月に熊本地裁で特別法廷の違憲性を認める画期的な判決が出ている。そして二〇二二年四月にはFの遺族により第四次再審請求が行われ、二〇二三年七月には弁護団が熊本地裁に新証拠を提出するなど、現在も菊池事件の再審をめぐる取り組みは続けられている。⁽²⁹⁾

『熊笹にかくれて』が発表された一九六〇年五月は、いま概括した菊池事件の経過では死刑確定後の第一次再審請求(一九五七・一〇)が棄却され、第二次再審請求(一九六〇・一二)の準備が進められていた時期にあたる。作中で主人公の大学の英語教授・堀越盟^{ちかづ}が事件記録を読み終え、事件の真相解明に向けて活動を開始する物語内の現在時は、第一次再審請求が福岡高裁で棄却された直後の一九六〇年二月二五日に設定されており、実際の事件の時系列をほぼ踏襲していたといえる。また、作中で事件記録を介して開示される賀毛事件の内容も、Fが賀毛辰治、Hが賀毛勇など変名にされているものの、発生場所や時系列も含め現実の事件の経過がほぼそのまま引き写されている。先述のように『熊笹にかくれて』には賀毛事件Ⅱ菊池事件のオルタナティブな真相を提示しようとする企図があったといえるが、それはこうした最初の再審請求棄却後にやや行き詰りかけていた発表当時の事件をめぐる状況を考え併せるとき、よりアクチュアルな意味を帯びた営みであったことがわかるだろう。

また、同時期の菊池事件をめぐる重要な事項として、その救援運動の広がりについても確認しておきたい。具体的には、一九五三年の死刑判決後に、菊池恵楓園自治会の要請により全国的な患者の自治組織である全国ハンセン氏病患者協議会(全患協)が本格的にFの救援に乗り出し、自由法曹団の関原勇、野尻昌次、柴田睦夫ら弁

護士の助力を得て助命嘆願運動が展開されていく。また、最高裁での死刑確定翌年の一九五八年三月には、岩波書店編集者の玉井乾介を事務局長として、多数の文学者や政治家、学者らにより「F氏を救う会」（原名称は本名を記載、以下「救う会」）が結成され³⁰、再審請求支援と助命嘆願の署名運動を展開していった。玉井は、会の成果について以下のように述べている。

「F君を救う会」が結成されたのは一九五八年の三月のことであつたから今年で三年以上になる。「……」私たちが全患協の諸君の努力に何か加えるところがあつたとすれば、それは療養所の中の声を、一步でも社会の人々に広く伝えたことにあるのだろう。／助命嘆願は四万名も超えた。この四万の人々の嘆願署名は中央保護審査会に届けられ、F君の生命を今なおささえている大きな力となっている。「……」／朝日新聞も、産経新聞も、またアカハタも、熊本日日もこの事件を報道したし、木々高太郎氏は「熊笹にかくれて」という探偵小説も作つた。／その取り上げ方はいろいろであるが、この事件に何かしらの関心がもたれたことは確かである。（玉井乾介「藤本事件について思う」、『全患協ニュース』、一九六・八・一。原文では本名を記載）

ここに記されるように、『熊笹にかくれて』はまさにこの救う会の運動が拡大し、徐々にメディアでも取り上げられるようになっていく渦中で発表された。そしてこのテキストの刊行自体が、その当事者にとって単に運動の広がりを示すものとしてだけでなく、事件への社会的な関心を喚起する一つのメディアとしての役割を果たしたと捉えられていたこともわかるだろう。

なお、『熊笹にかくれて』にはこの救う会をモデルとした組織と運動への言及もみられる。それは作中では「東京J書店の編集課長の川崎正二氏」が「その交友達」と一九五九年三月に結成した「賀毛辰治を救う会」として描かれている。ただ、実際の救う会の結成は一九五八年三月であるためやや時間的な齟齬もあったといえるが、作中でその運動は盟が事件を知るきっかけとして位置付けられる。以下に引用するように、盟はケニーの店の前

ですれちがう「学生マント」を羽織った「背の高い男」から手渡された一枚のピラを通して事件の存在を認識していくのである。

みるともなしに、そのピラをみると、「私は無実です」とあり、別題めいたところに「死刑囚のライ患者が悲痛な叫び」とかいてある。そのあらずじは、熊本県の一人のライ患者が、証拠デッチあげて死刑を宣告されて、上告もしたが、いずれも棄却され、死刑の言い渡しは今や確定した。ところが、全国の同じ患者が、救援運動に立ち上り、今や文化人、社会知名人、も徐々にそれに加わっている。どうか救援運動に参加して貰いたい——という意味のことが、書いてあるのであった。／どこかの新聞で見たことのある事件だが、まだ片付かないのか、正否は外から容易に判断は出来ないが、近頃これに似たデッチあげ裁判、誤った裁判が少なからずある——という淡い感想を持つただけで、その時の盟は、そのまま忘れて了った。(二〇頁)

ここに記されるように、盟はピラによって賀毛事件の存在を知るも、当初は数ある「誤った裁判」のうちの一つでしかないという「淡い感想」を持つのみであった。しかし、同じ晩にその事件が好意を寄せるケニーの故郷である熊本県で起きた出来事であったことを知り、またケニーの本名が「賀毛兼衛」というピラに書かれた死刑囚と同一の姓であったことも明かされたことから、盟は事件に対する関心を深めていくことになるのである。この最初の主人公と事件の関わりを表象には、当時の日本社会における菊池事件及びハンセン病をめぐる問題が、社会問題としては認知されながらも一般に深い関心が持たれるまでには至っていなかったことが示されているといえよう。また、この盟の当初の関心の稀薄さは、東京から遠く隔たった熊本県の事件であったという物理的な距離感に起因していたとも考えられる。このように盟が心理的・空間的に隔たりのあった事件を、自身が好意を寄せるケニーを介して身近で切実なものとして捉え直していく在り様は、事件をめぐる問題に対して一般読者が関心を深めていく一つの回路を例示するものだったといえるだろう。

それでは、『熊笹にかくれて』はハンセン病の当事者や菊池事件の関係者・支援者らにどのように受け止められたのだろうか。例えば、『全患協ニュース』（一九六〇・六・一五、七・一、八・一）には、テキストの刊行直後から「殺人の罪で死刑を宣告された男……最高裁でも上告棄却……しかし？」と同紙の読者には菊池事件を描いているとすぐにわかるような惹句が付された広告が幾度も掲載されていたが、その中でも注目されるのは、菊池恵楓園入所者で文学者の増韋雄の書評記事「読後感 木々高太郎著『熊笹にかくれて』」（『全患協ニュース』一九六〇・八・一）³¹である。そこでは、『熊笹にかくれて』について以下のように述べられている。

このごろ興味深く読んだ本に、木々高太郎「熊笹にかくれて」がある。ぼくが興味をもったというのは、この推理小説が、いま全患協が問題にしている藤本事件に取材していることがあきらかであったからである。「……」ぼくは、虚構である小説の世界から現実の事件の真相を嗅ぎ出そうとしているのだ。それは馬鹿げたことだ。だが、ぼくはこの小説を読んで、確かに一つの示唆を得た。「……」／藤本事件の真相は誰も知らない。否、知っているものはあるかも知れない。だが、それを語ってくれるものはいない。知っている人は殊更に口を緘している。被告はあくまで無実を主張している。ぼくらはその潔白を信ずるわけなのだが、真の犯人が出ないかぎり、申立ては認められそうもない。アリバイは成立すると考えられるのだが、それも証人になってくれる人はいない。そのもどかしさがときにぼくを苛立たせ、怒りとなり、かなしみとなっている。そういう状態の中に真相はこういうたぐいのものなんだ、と虚構の物語りをまことしやかに語るものが出た。それが「熊笹にかくれて」という異色の推理小説だったわけだ。

ここで述べられるように、『熊笹にかくれて』で描かれる現実の司法判断と異なる真相は、事件の捜査・裁判の不当性とFの潔白を信じる読者にとっては、それが「虚構の物語り」であることを十分に理解しながらも、「現実の事件の真相」として迫りくるものだったのである。このように『熊笹にかくれて』が事件の発生場所となっ

た熊本県のハンセン病当事者にも「一つの示唆」を与えるよう作用したことは、このテキストが同時期にアクチュアルな意味を持ったことを示しているだろう。

それでは、『熊笹にかくれて』が提示する事件のオルタナティブな真相とは、どのようなものであったのでしょうか。次節では、このテキストの「虚構の物語り」⇨フィクションの試みを分析したい。

五.『熊笹にかくれて』におけるフィクションの試み

『熊笹にかくれて』は「一 序曲」「二 第一の事件」「三 第二の事件」「四 再審請求」「五 心理法則」「六 終曲」の六章から構成されるが、その物語内容は大きく三つに分割できる。すなわち、第一に主人公の堀越盟が、東京銀座でバーを営むケニー（賀毛兼衛）と出会い惹かれていくと同時に、その郷里で起こった賀毛事件に関心を深めていく部分である（一）。第二に、賀毛事件の概要と裁判の過程が、盟が読む事件記録によって再構成される部分である（二・四）。第三に、盟とケニー、そして盟の同僚のスペイン語教授で社会問題に強い関心を持つ荒三一郎の三人が、大心地先生の助言に従い、事件現場となった熊本県に赴き独自に実地調査を展開していく部分である（五・六）。池田浩士が『熊笹にかくれて』のプロットについて「熊本県の一死刑囚をめぐる救援運動に主人公がかかわっていく過程が、同時にケニーの過去と現在が明らかになっていく過程と重なりあう」（前掲『死刑の「昭和」史』）と指摘するように、物語は事件の真実に迫っていくミステリ的な側面と、盟がケニーと親密になるとともにその人物の謎が明らかになっていくロマンティックな側面が絡み合いながら展開する。以上のような物語構成をふまえたうえで、ここからは作中で提示される事件の真相と真犯人が明かされる結末部分の検討を行いたい。というのも、当然ながらそこにテキストが提示する現実の事件に対する一つの解釈が存するからであり、またそこで明かされるケニーの秘密が盟のロマンティックな行方を左右するものでもあったからである。

先に述べた通り、テキストの眼目は現実の事件捜査の盲点を突くあり得べき真実を探ろうとする点にあったと

いえるが、そこで示される重要な発想の転換は、大心地が述べるように被告である辰治の無実を立証するのではなく、事件の真犯人を探すことを優先するという観点にあった。三人から現地調査の結果を聞いた大心地は、辰治と勇双方に怨恨を持つ人物が疑わしいという結論に至る。その結論から、ケニーは「エリミネーション・メソッド」により佐伯宣二と自身の次姉・芳江の二人を割り出していくのである。

第一の事件（ダイナマイト事件）については作中で明確に記されているわけではないものの、佐伯が犯人であったことが示唆されている。佐伯は郵便局員時代に切手を使った公金費消の罪で前科一犯となり、その後は新橋の「バア・チングリ」で「ゲイ・ボーイ」となっていたが、村を出る際の家産処分絡んだいざこざから勇に恨みを持つていた。そして、結末近くのケニーとの対話において佐伯が事件当時ダイナマイトを使用する「村の堤防工事の人夫として、村へいつた」と凶器の入手経路を明かしていることから、第一の事件の犯人であったとみて間違いないだろう。

さらに、第二の事件（殺人事件）の真犯人は、母の死後に幼い「肺病」の弟と「ライ病」の妹を育てるために勇の情婦となったものの怨恨を募らせ、また辰治に対しても長姉・松江を自殺に追いやったことから恨みを持つていた芳江であり、犯行に使用された凶器は「庖丁のようにまつすぐ」になるまで磨いた「大鎌」であったことも判明する。物語の結末はケニーが東京・月島の「貧民窟」にあった芳江の住居を突き止め、久々の対面を果たす場面となっているが、そこで芳江は事件後の心情を以下のように述べている。

「兼、この八年間の感想はな——、わたしは苦しい生活と、同胞の病氣と戦つて、何にも覚えもせず、良心の呵責で、心は毎日荒んでいた。辰治はどうだ。刑務所はせまくて暗いであろう。然し、あれは本をよみ、人情を学び、そして今のような——判るのだよ。あいつの書いた字だの文章だのをみると——人間になつた。そして死刑を眼の先きにみているものの、日本中の同情にあたためられているじやあないか。幸福というもの、どこにある！それは浅はかな人間には判りもせず、さとれもしないのだ。——それは天のどこか

から降ってくるものなのだ。いいか、兼坊や、その天を、時に仰ぎみなくてはいけない。弟と妹をひきとつてくれよ。皆さんに聞いていただいて、これだけのことをお前に言えたのは幸いだつた。」(二七六頁)

ここには、不幸に陥れたはずの辰治が獄中で「幸福」な「人間」としての生を送っているのに対して、復讐を果たしその罪からも逃れたはずの芳江の方が「良心の呵責」に苦しめられる悲惨な状況にあったことが吐露されている。冤罪により死刑になった辰治が本当に「幸福」といえるのかについては留保が必要だが、弟と妹のケアを図らずも一人で担うことになり、そのことが遠因となって殺人まで犯した末に、誰に頼ることもできない貧しい隠遁生活を送らざるを得なかった芳江の境遇が苦しいものであったことは想像に難くない。このように、結末部で明かされる同一犯によるものとみなされていた二つの事件が、それぞれ別個の複雑な人間関係から引き起こされた異なる犯人によるものであったという真相は、現実の事件解釈に「一つの示唆」を与えうるテクストの重要な側面であったといえる。

なお、こうした事件のオルタナティブな真相を導く要素として、現実とは異なる辰治の「自白」に対する解釈が示されている点も挙げられる。そもそも、先にも述べた通り実際にはFの唯一の自白調書は逮捕時の銃撃で重傷を負いながら強制的にとられたものであった。それが作中では、辰治に対する取り調べが逮捕当日ではなく翌日に行われたことになっており、さらにそこで「自白」をした理由も、松江に対する「恋とねたみ」から彼女を「ライイ病であると言いつら」し、自殺にまで追いやってしまったという辰治の過去の過ちに対する贖罪の意識に由来するものと変更されていたのである。このような脚色は、辰治の善性を強調し作中の事件のヒューマニズム的な側面を高める効果があったといえるが、それと同時に秦重雄が『挑発ある文学史 誤読され続ける部落／ハンセン病文藝』(かもがわ出版、二〇一・一〇)で指摘するように「ライイ病であるといふらす」ことがその相手の名誉を傷付け、社会的な地位を失墜させるものとして機能してしまう「地域社会」の独特な磁場を描出することにも寄与していた。また、こうした辰治自身のかつてのハンセン病に対する差別的な認識・態度が自身の罪と

して跳ね返ってくる構図を示すことは、暗に辰治が現在進行形で受けている差別を行っている側の罪をも照射してしまっているといえるのではないだろうか。このように、『熊笹にかくれて』の脚色により描出された事件当事者の複層的な人間関係や心理の在り様は、ハンセン病への差別・偏見からいかに「暴力」が生み出されていくのかという構造の一端を描いたものであったのである。

それでは、もう一つの物語の軸となっていた盟とケニーのロマンスはどうなったのであろうか。そもそも、テクストは同僚の荒に連れられていったバーで盟がケニーに一目惚れする描写から始まり、そこから彼の恋愛・結婚観や家族関係の描写が続いていくところからも明らか通り、物語の最も大きな推進力となっているのは盟のロマンスの行方であり、ケニーという人物の謎であったとさえいえる。そのケニーにまつわる秘密は結末部分における芳江との対面時に以下のように明かされている。

「お姉さん、僕だよ。ここで、自首しておくれ」

「僕とは誰だ。さては女装だな。佐伯の仲間のゲイ・ボーイだな。知り合いいないよ」

「^{ゲイ}ゲイ・ボーイだ。でも佐伯の仲間じゃあない。もう十三年も前に家出をした、僕だ」

「おお、兼衛か。お前、その商売をしてるんだね。いい着物を着てるところは、相当だな」

「お姉さん、僕だつて思い切つてこんな商売をしてるのだ。相当でなくて、どうなつたつていうんだ。」

(二七二頁)

ここでケニーは、それまで盟の前で使っていた「如何にも落付いた年増の女」のような言葉遣いではなく、『僕』という自称詞を用いた男性的な言葉遣いで、自身の生物学的な性別が男性であり、『女装』の『ゲイ・ボーイ』であったことを明かしている。なお、ケニーの性別については、自身の店で女給を「女ボーイ」と呼ばせていたことやケニーの書く文字が「男性のような字体」であったこと、『女性としてはぺしやんこの胸』などと記され

る身体的特徴や、「子どもが生めない」と言つて盟との結婚を固辞していたことなど、作中に暗示的な描写が散りばめられてもいた。⁽³²⁾ 池田浩士はこのケニーの秘密に「ひとたび抱いてしまった先入見から自由になることがいかに困難かということの、ひとつの暗喩」(前掲『死刑の「昭和」史』)を読み取っているが、物語内に即してみれば、盟にとつてそれは自らが切実に望んでいたケニーとの結婚が不可能であるという事実を突き付けられることでもあった。そのことについて盟がどのように考えたのか、その後二人の関係がどうなったのかについては作中には記されていないが、「女であると思つていたケニーが男であつたと判つても、その恋情は消し難かつた」と秘密を知つた後の盟の心情が記されていたことからすれば、その後には盟が結婚という形ではなくケニーとの恋愛関係を継続しようとしていったとも推察されるだろう。

そもそも、盟には自身の過去の結婚に対する後悔があつた。ただ、その後悔は自身と前妻の関係にあつたのではなく「結婚だけは自分の考えで、という信条」があつたにもかかわらず、自身の「学生時代からの恋愛論や結婚論はすてて了つて、親が希望するからというので、親孝行のつもりで、結婚した」という経緯に由来していた。盟はこうした過去の失敗から「恋愛なくしては結婚はすべきではない」という自らの信条に即した主体的な恋愛・結婚を志向していくのだが、物語前半の盟は両親、特に「親子でもあり友達でもある」という母親の存在から自由ではないように見える。しかし、物語の後半部に至ると、両親が「旅行もよいが、伝染病ならやはり近づかぬがよいね」と止めるのも聞かずに、盟は主体的に賀毛事件の実地調査に赴くようになっていく。このような展開から考えると、盟が事件調査に乗り出しケニーとの関係を深めていくプロセスとは、盟が両親から独立し、個として主体化していくプロセスともなつていたといえるだろう。さらに、先に引用した「女であると思つていたケニーが男であつたと判つても、その恋情は消し難かつた」というある意味では取つて付けたように記される盟の心情も、このことをふまえて考えるならば、盟が今後のケニーとの関係性も含めて家族という形態から解放された生を営んでいく予兆として読み取ることができるのではないだろうか。そもそも、先に述べたように賀毛事件の背景にもケニーの家族をめぐる複雑な事情があり、またその事件の解決は盟の側とは異なり、むしろそれまで

断絶されていた家族関係の回復を伴うものでもあった。そのことからすれば、『熊笹にかくれて』の主軸となるミス터리とロマンスにはどちらもうこうした家族の主題が通底しており、物語を通じてその多面的な在り様が描かれていたともいえるだろう。

六・ 結論

本稿では、これまで木々高太郎の『熊笹にかくれて』について、一九五〇年代に転回していった木々の探偵小説論との相関、木々のハンセン病に対する認識の在り方、そして題材となった菊池事件の表象などの観点から考察してきた。そこで明らかになったのは、「人間の知恵の勝利」を描くという晩年の木々が見出した探偵小説の本質が同時期の社会派に近似していたこと、そして『熊笹にかくれて』はその実践として捉えられるものであったことである。しかしながら、それと同時に木々のハンセン病理解には当時の国家的な強制隔離政策を推進する論理と重なってしまう限界があり、『熊笹にかくれて』にもそうした認識と連続する側面があったことも明らかとなった。ただ、その一方でテクストの菊池事件の表象には、現実には立証することが困難な事件のあり得べき真実を提示するというフィクションの特性を活かしたアクチュアルな試みと捉えられる側面があったことも確認した。

しかしながら、いま概括したように、『熊笹にかくれて』は冤罪が疑われている現実の事件の司法判断とは異なる真相を解明しようとする志向は有していたものの、ハンセン病に対する差別的認識が温存されていることにも示唆されるように、全体として事件をめぐる司法権力の不当な行使に対する批判的な視座は稀薄であったといえる。こうしたテクストの傾向は、そもそも社会問題にさして関心を持たない盟を主人公とし、事件調査の動機が、ケニーをめぐる謎の解明という目的に収斂していくような、ロマンスを主軸とした物語になっていたことに起因していた。中島河太郎は同作の「解説」(『熊笹にかくれて』、桃源社、一九六〇・五)で作中の盟の行動目

的を「社会正義の美名に動かされたのではなく、興味を抱いた女性に潜む陰影を究めたかった」ことにあると端的に述べているが、このような動機であったがゆえに、テクストでは事件の真犯人を探ることへの興味は持続するものの、辰治自身の境遇や死刑に至ったプロセスの不当性に対する関心は、物語の進展とともに稀薄化してしまうのである。こうした点をふまえるならば、『熊笹にかくれて』とは、現実とは異なる事件の真相に到達しているという点でかろうじて「人間の知恵の勝利」は描かれるものの、その動因となるべき「暴力」「金力」「権力」の不当な行使に対する批判や抵抗を欠いているという点で、木々の探偵小説論の実践としては失敗した試みであったといえるだろう。

註

(1) 同事件はこれまで「藤本事件」と称されることが多かったが、近年では事件の起こった地名を冠した「菊池事件」という名称が用いられるようになっていいる。そのため、本稿でもこれに倣って「菊池事件」という名称を用いるが、引用文献等の記載は原文通りとする。

(2) なお、『熊笹にかくれて』の他に菊池事件を題材としたテクストに冬敏之『藤本事件』（『民主文学』、一九七四・一一九七五・八）がある。同作は、『熊笹にかくれて』とは対照的に被告の来歴や事件の経緯、逮捕から死刑判決が下って以降に救援運動が本格化されるまでのプロセスを詳細に描いたノンフィクション・ノベルというべき内容で、ここでは死刑判決がハンセン病の「患者運動の高まりを恐れる政治的な意図」から行われた「権力による合法的な殺人」であったことが別出されている。

(3) 各作家の収録作品は以下の通り。第一巻・江戸川乱歩『べてん師と空気男』、第二巻・大下宇陀児『悪人志願』、第六巻・城昌幸『死者の殺人』、第七巻・高木彬光『断層』、第八巻・島田一男『去来氏曰く』、第一一巻・香山滋『靈魂は訴える』、第一二巻・渡辺啓助『海底結婚式』、第一三巻・日影丈吉『真赤な子犬』、第一四巻・鮎川哲也『白の恐怖』、第一五巻・仁木悦子『殺人配線図』。なお、刊行が予告されていた第四巻・横溝正史『黒い紋章』、第五巻・角田喜久雄『怖しき一夜』、第九巻・水谷準『悪魔の応接室』、第一〇巻・山田風太郎『射殺権』は未刊のままとなっている。

(4) 例えば、講談社の「書下し長篇探偵小説全集」ではその最終配本となる第一三巻を「十三番目の椅子」として一般公募し、鮎川哲也『黒いトランク』が入選している。こうした例からも、書下ろし全集が新進作家の発掘・育成も企図していたことがわかるだろう。

- (5) ただし、山村正夫によれば木々は会長時代に国際的な作家間のネットワーク構築や国際探偵作家クラブ設立のために尽力していたものの、その構想が果たされることもないまま立ち消えになってしまったことにより、文壇内では微妙な立場になってしまったという（『推理文壇戦後史 Ⅲ』双葉社、一九八四・一二）。また、中島河太郎もこの頃の木々について「もはや推理小説へは昔日の関心を失われたかのようにだった」と述べる通り、探偵小説ジャンルに対する意欲が失われていた側面もあったようである（『作品解説』、『木々高太郎全集5』朝日新聞社、一九七二・二）。
- (6) 山梨県立文学館編『企画展「松本清張と木々高太郎」図録』（山梨県立文学館、二〇〇二・九）には、世田谷文学館所蔵の「大心池先生最後の事件」冒頭部分の原稿画像が掲載されている。
- (7) なお、横井は別のところでも同作を「木々なりの社会派推理小説を試みたものであった」と評している（『解説』、『木々高太郎探偵小説選』、二〇一〇・六）。
- (8) 木々は一九五六年一月に「書下し長篇探偵小説全集」の第四巻として『光とその影』を発表している。
- (9) なお、『木々高太郎全集』監修者の中島河太郎は「作品解説」において「三十一年に『光とその影』、三十五年に『熊笹にかくれて』の書き下ろし長篇はあったが、それほどの反響は呼ばず」と同作に言及しながらも全集への収録を見送っていた。このことに示唆されるように、同作が発表時に話題とならず、木々の他の作品と比べて著しく評価が低かったことが、現在まで復刊や再録が行われなかった理由であったといえるかもしれない。
- (10) 木々は叢書のラインナップにフロイトを加えた理由について以下のように述べている。「ジグムント・フロイドの『ミケランジェロのモーゼ』の如きは歴史的・考証的の論文であるが、小説よりも興味深い叙述で出来ている。私はあれを小説として翻訳することが立派に出来ると考えて、翻訳を試みてみた」（『推理小説の範囲』（『プロメテ』、一九四七・一））。
- (11) 日下三蔵は、一部の愛好家によるジャンルである「探偵小説」から、一般的・国民的な娯楽としての「推理小説」への「真のターニングポイント」となったのは、清張の登場直前の仁木悦子『猫は知っていた』のベストセラー化であったことを指摘している（『日本ミステリにおける仁木悦子の位置』、二〇一九年度前期コレクション展「仁木悦子の肖像」リーフレット、世田谷文学館、二〇一九・四）。
- (12) 山村正夫は、清張の登場と推理小説という名称の関係について以下のように述べている。「文壇から冷遇され一般から異端視されてきた探偵小説は、松本清張氏の出現により社会派のミステリーがジャーナリズムを席卷するに至って、はじめて正當な市民権を得た」「探偵小説は推理小説と名称を改め、いまやまったく別のジャンルの小説のごとき感を呈してしまった」（『わが懐旧の探偵作家論』双葉社、一九九六・五）。
- (13) 横井司は、木々が「愈々甲賀三郎氏に論戦」（『ぶろふいる』、一九三六・三）のなかで探偵実話を引き合いに出しながら「實際

にあった事件でも語る人が豊富なる芸術的観照をもって語るときには、立派に探偵小説と言われてよいものが出て来るのももちろんである」と述べていることに着目し、その探偵小説論の骨子を「素材や形式よりも書き手の『芸術的観照』が優先する」点にあったこと、しかしそこでもやはり「芸術」の内実にまで論が及んでいなかったことを指摘している（『探偵小説のディスクール』、博士學位論文、一九九五）。

(14) なお、この木々の探偵小説観は、その後「探偵小説芸術論」（『探偵春秋』、一九三六・一〇）において、従来結合されることのない人間の論理的活動と芸術的活動を止揚したものが探偵小説であるという「探偵小説最高文学論」にまで至っている。

(15) 同年三月三十一日の探偵作家クラブ例会ではこの木々の新論をめぐる討論が行われ、探偵文壇における新たな論争として新聞紙上に報じられていた（「再び 乱歩・高太郎論争／本質は知恵の勝利」をめぐって」（『毎日新聞』朝刊、一九五六・四・四）、「探偵小説界に波高し／果てしない “知恵の勝利” 文学説／三巨頭頭に再び大論争」（『東京タイムズ』一九五六・四・七）。なお、乱歩はこの論争について「結局という作品が木々君の理想とするものがわからないので、論争のしようがなかった」と回顧している（『江戸川乱歩全集 第二九巻 探偵小説四十年（下）』、光文社、二〇〇六・二）。

(16) こうした戦前・戦後の「無らい県運動」の展開については、無らい県運動研究会編『ハンセン病絶対隔離政策と日本社会無らい県運動の研究』（六花出版、二〇一四・四）を参照。

(17) なお、木々は同書のなかで、こうした人生相談欄の回答者は当時女性が担うのが一般的だったものの、木々がほぼ最初の男性回答者となり、その回答内容が女性と異なり具体的であったことで評判を呼んだと述懐している。

(18) 他にも「二、三代前にライ患／いとこの縁談で、まじめな青年だが」（朝刊、一九六一・三・一一）、「“血筋が悪い”と反対／純真な農家の娘との結婚に」（朝刊、一九六五・五・一五）、「ハンセン氏病の血統／彼女との結婚に周囲が猛反対」（朝刊、一九六七・一〇・二一）などがある。

(19) この講演及び座談会は、それぞれ林嶽「科学と善意」（『愛生』、一九五四・一〇）、「御談義拝聴 林嶽先生に聞く座談会」（『愛生』、一九五四・七）としてまとめられている。

(20) 木々は「光明園にゆく」が収録された『世相の生理』（読売新聞社、一九五五・四）において、こうした療養所訪問後にハンセン病の話題を話す際に、「浮浪」患者の多いことや、伝染病のため「断種する必要がある」といった「失言めいたこと」をしばしば述べていたことを述懐している。それが「失言」と捉えられる内容であったことへの自覚はあったようだが、そこで木々は「深い同情と愛情」から「事態をはっきりさせ」るためにあえて歯に衣着せず述べたものだったと居直っている。

(21) なお、金貴紛は、こうした同時期の朝鮮人ハンセン病患者者の「密航」を危険視・問題視する言説に対して、戦中に強制動員等で来日したにもかかわらずハンセン病患者として療養所に隔離され、戦後には突然「外国人」として国外退去の対象とされた

という経緯が全く考慮されずに危険性ばかりが強調されていたことを指摘している（『在日朝鮮人とハンセン病』クレイン、二〇一九・三）。

(22) この光田健輔の「密航」の認識における問題点については、ハンセン病問題に関する検証会議『ハンセン病問題に関する検証会議 最終報告書』（財団法人日弁連法務研究財団、二〇〇五・三）を参照。なお、光田の発言は『第七回国会 衆議院厚生委員会議録第五号』（<https://kokkai.ndl.go.jp/simple/text/100704237X00519500215/65>）から引用。

(23) 宮崎松記の発言は『第一二回国会 参議院厚生委員会会議録第一〇号』（<https://kokkai.ndl.go.jp/simple/text/101214237X010195110810>）から引用。

(24) 同事件の概要については、藤野豊「解説」（『近現代日本ハンセン病問題資料集成 戦後編 第8巻』不二出版、二〇〇四・一）、熊本県「無らい県運動」検証委員会編『熊本県「無らい県運動」検証委員会報告書』（熊本県「無らい県運動」検証委員会、二〇一四・一〇）、「菊池事件の再審をすすめる会 HP」（<https://www5b.biglobe.ne.jp/~naoko-ki/kchindex.html>）等を参照。

(25) この点については、前掲『ハンセン病絶対隔離政策と日本社会 無らい県運動の研究』及び前掲『熊本県「無らい県運動」検証委員会報告書』を参照。

(26) この世良鑑定の問題点の指摘及び鑑定書の引用は、吉弘光男・宗岡嗣郎編『犯罪の証明なき有罪判決 23件の暗黒裁判』（九州大学出版会、二〇二二・二）による。

(27) この再審請求では他にも第二の事件で凶器とされた短刀だけでなく、Fが犯人ならば返り血を浴びているはずの衣服にも逮捕時に流血したF自身の血痕しか検出されていないことや、Fの脱走中にその犯行に見せかけたFの弟宅への盗難事件（別の部落の人物が逮捕）が発生していた事実などが挙げられている。

(28) なお、当時の法務大臣・中垣國男の死刑執行命令書への署名・押印は、第三次再審請求が棄却となる以前の九月二二日段階で行われており、中垣はその再審請求の内容すら把握していなかったという（前掲『ハンセン病問題に関する検証会議 最終報告書』）。

(29) 二〇〇〇年代以降の再審請求をめぐる動向は、徳田靖之「菊池事件国賠訴訟」（『冤罪白書2020』、燦燈出版、二〇二〇・一〇）に詳しい。それに加え、前掲「菊池事件の再審をすすめる会 HP」、前掲『犯罪の証明なき有罪判決 23件の暗黒裁判』、「菊池事件、新鑑定書を提出／再審請求／弁護士「親族供述に矛盾」」（『熊本日日新聞』朝刊、二〇二三・七・二〇）等も参照。

(30) 文学者は阿部知二・秋田雨雀・江口渙・大西巨人・杉浦民平・堀田善衛・大江光雄・高橋たか子・石井桃子・中野菊夫・野上弥生子・柳原白蓮、政治家は長谷川保・神近市子・武藤運十郎・山花秀雄・中曾根康弘、学者は浦池正紀・永丘智郎・中村哲・

吉永清が名を連ねている（「F氏を救う会」趣意書」、前掲『近現代日本ハンセン病問題資料集成 戦後編 第8巻』、一七一頁。原題は本名を記載）。

(31) 本記事の所在とその意義については西村峰龍「菊池事件と「熊笹にかくれて」療養所内での救援活動の実態」（『阪神近代文学研究』、二〇一六・五）を参照した。

(32) ただし、こうしたケニーの本来の性別から顧みるとき、自らの故郷でもある熊本県水源村への事件調査に際してケニーが男装をしていったことには疑問が残る。なぜなら、もしケニーが故郷で男性として成育したとするならば、男装は自らの身許を明かしてしまいかねない危険性の高いふるまいだったといえるからである。

※本稿における『熊笹にかくれて』の本文引用は初刊の「書下し推理小説全集」第三巻（桃源社、一九六〇・五）から行い、括弧内に頁数を記した。また、資料引用に際して旧字は新字に改め適宜ルビを省略した。

※本研究はJSPS科研費 JP23K25304の助成を受けたものである。